山崎郷土研究会報

No. 59

57.5.30

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

山崎闇斎と山崎（中）

島田　清

〔おことわり〕

文中掲出の人物が故人である場合は、歴史記述の通則にしたがい、総べて敬称を省略しました。

三、既刊文献の調査（続）

(A)　郷土研究書（続）

(Ⅳ)　『兵庫県郷土資料（第一輯）先賢小伝』

岡久穀三郎の撰輯、昭和七年八月四日に刊行されたものです。しかし、山崎闇斎のことは載せていません。

郷土に関する地誌、歴史、人物史の文献が、山崎闇斎をどのように扱っているか、の大要は、およそ、理解できただろうと思います。まとめていうと、「山崎闇斎は宍粟郡山崎町で生まれたのではない」ため、兵庫県下の歴史や人物史を書く中へ〃加えない〃という態度が多くとられています。しかし、その祖父（浄泉）が山崎町の人」であるところから、これを〃加える〃という立場をとるものもあ

目次

山崎闇斎と山崎（中）……島田清清……一
伝「播磨公弁円の墓」について……岩井忠彦……七
続群書類従山科家文書より見た長水宇野氏の内紛……藤原すみ……九
古寺を訪う……安井清介……十
史跡部だより……十五
事務局だより……十六

ります。それぞれ、意味のあることですから、ここで、その是非を論ずるつもりはありませんが、江戸時代の後半、「闇斎は山崎の人」と簡単に記す文献が出てくるため、まじめに、実態を究明しようとする人もあらわれました。ちょうど、今回の問題提起と同じ情勢が起こったのです。右に掲げた文献中でいいますと、『播磨鑑』がそれに当り、著者平野庸修は持ち前の研究癖をフルに発揮して解明に取り組んだのでした。しかし、充分な成果を収めるところへは行っていません。

(B)

一般書

一般書では、人物辞典について見てゆくのがよいかと思います。この種の書物で、最も早く刊行され、その後、何回もの改訂・増補によって代表的な文献になった『大日本人名辞書』には次のように出ています。

ヤマサキ　アンサイ

山崎闇斎は鴻儒なり。名は嘉、字は敬義、小字は長吉、後ち、清兵衛と改め、又、嘉右衛門と改む。闇斎・垂加、

又、梅庵と号す。京師の人。其の先は播磨山崎邑の人。因りて以て氏とす。父清兵衛、木下家に仕ふ。後ち、致仕して浄因と号す。京師に来りて針医を業とす。母は佐久間氏。

（下略）

他の人名辞典も大同小異ですから掲げませんが、簡単なものになりますと、「闇斎は京都で生まれた」というところから書いているのもあります。しかし、この問題は、識者の間で、一応、わかっていたように思われます。

ところが、山崎町で、このことに疑問を持

つ人があらわれるようなことが起こりました。それは、闇斎の木像が山崎町に寄贈されたことです。前稿のはじめにも書いたように、この木像には、伊藤仁斎の嫡孫で、著名な学者である伊藤善韶（号東所）が、自ら筆をとって、

〃山崎闇斎先生像
略伝。播州宍粟郡山崎村人・市師移住。
初妙心寺僧也。
絶蔵主云。後、
土佐住。谷時
中学。爰至、
髪復、儒成。
故土佐去、又、
京師住。晩年、
神道帰。
余深愛此像。
伊藤善韶
所蔵（花
押）〃

と書いているのです。これを見た人が、「文字通り受取るのが正しいのではないか」という疑問を抱いたのも、不思議ではありません。

〃東所のような著名な学者が間違を書く筈がない。また、「闇斎屋敷」として、昔から言い伝えられた場所も残っている。闇斎は、やはり、山崎で生まれたのではないか。〃

こうした疑問が、このとき、人びとの脳裡にひらめいたのです。私が、「山崎闇斎と山崎」の講演を依頼されたのも、その余煙が巷間に残っていたためでしょう。

四、山崎家と山崎

山崎闇斎の家系については、生前に闇斎が書いた『山崎家譜』がのこっています。これを見ると、父、祖父、曽祖父も明白です。次に、闇斎の周辺を概観しつつ、山崎との関係を述べてみましょう。

『家譜』によりますと、闇斎の曽祖父は「浄栄」といいました。「播州の人」と書いてあります。そして、その子「浄泉」のところには、「播州宍粟郡山崎村に生まれ、木下家定侯に仕えた」と書いてあります。浄泉の子はすなわち闇斎の父浄因で、家定

最新型カラー現像機導入
カラープリント・1時間仕上可能
カメラ、カラープリントなら技術と信頼の
コーエーカメラ
Specialty Camera Shop
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎2-2089

の後嗣利房に仕え、利房が城地を失っていた間よく面倒を見ましたが、復位すると浪人した、と書いてあります。闇斎の生誕は、この父が京都へ移った後のことで、元和四年（一六一八）です。

闇斎の生誕が「山崎」でないことはこれではっきりしたと思います。しかし、この間の事情はもう少し詳しく述べないと、わからぬことが少くなく、秀吉の義兄家定との関係も突込んで置く必要があります。これから、話をその方へ進めて行きましょう。

まず第一に述べねばならぬのは浄泉です。山崎で生まれ、生活したのなら、その場所はどこだったのか、が問題です。このことを書いた文書・記録は、もちろん残っていません。しかし、「闇斎屋敷」という呼び名で、〃ここで生まれたのだ〃と伝える場所が「鹿沢町」のうちに残っています。闇斎が生まれた所ではなく、もちろん生活した場所でもないところを「闇斎屋敷」と呼ぶのは変な話だ、ということになりますが、これは、次のように解釈すべきだと思います。すなわち、この場所の呼び名は、元来、「山崎屋敷」であったのです。いつの時代でも、偉人が生まれると、その人と関係ある場所が注目され、偉大であればあるほどたいせつにされ、しまいには、尾鰭をつけて宣伝されます。「山崎屋敷」も、闇斎の名が高くなるにつれてしだいにそれと結びつけられ、「闇斎の祖父の居た所」が「闇斎の居た所」へエスカレートしていったのです。さきに掲げた伊藤東所が活躍した時代は、闇斎の活躍した時代より百年ほど後です。そのころには、闇斎の偉大さが広くゆきわたり、偶像化されてきました。そして、関係のある遺物や遺跡にも尾鰭がついてきました。そうしたことから、江戸時代後期には、闇斎を「山崎の人」と書く文献があらわれました。「闇斎」と「山崎」とが〃生誕地〃ということばで直結されるようになったのは、こうしたことからです。山崎家の居住地――祖父浄泉の生誕地、居住地――が山崎町鹿沢の一角にあったことは、推定して間違いないことだと思います。

第二は、この祖父浄泉が木下家定に仕官するようになった事情です。これも、このことを明確に書き

時計・ぬがね・宝石
津村時計店
中央通り・TEL②0355

記した文書は残っていません。しかし、羽柴秀吉の播磨平定戦と、その後の経営の中に起こったことですから、その事件の流れを追いながら推考してゆくこととします。

天正八年（一五六〇）一月十七日、東播の要害、三木城が開城しました。天正六年春より三カ年に亘って抵抗した別所長治は刀折れ矢尽きて自刃したのです。残余の赤松系諸将も五月までに討平され、播磨一円は秀吉の所領となりました。秀吉は、漸く国持ち武将の列に加わり、織田軍団の一翼を担う地位にのしあがったのでした。

ここにおいて、居城をどこに築くかが問題となりました。秀吉は、はじめ、堅塁であった三木を考えたようでしたが、参謀黒田孝高の意見を容れて姫路に定め、直ちにその工を起こしました。信長の天下平定戦はまだ中途であり、諸方豪族との戦闘は、なお、続いています。姫路新城の構築工事は、このため、突貫工事で進められました。そして、翌九年の春には一応の竣工を見ました。日本における最初の天守閣である安土城ができたのは天正四年でしたが、秀吉はこの工事に従い、城造りの実際を身につけていました。それだけに、播磨路では最初の天守閣をここに築いたのでした。文禄元年（一五九二）肥前国名護屋に下る細川幽斎が、飾磨沖から遥かに望見した記事をのこしているのは、それだけ、際立っていたためでしょう。

秀吉は、天正九年に、ここから鳥取城攻めの兵を出しました。また、翌十年には備中高松城攻略の軍を出しました。そして、同年六月、本能寺の変が起きたときは、高松城を陥れてここへ引揚げ、陣容をととのえて明智光秀討伐に出陣したのでした。

六月十三日、山崎の一戦で光秀は敗死しました。また、翌十一年の賤ケ岳合戦で柴田勝家が滅びました。信長の事業継承者としての地位はこれで確立しました。この間、秀吉の居城はずっと姫路でしたが、京都を長く離れておれぬ事情からみて、少し遠いのが欠点でした。

〃京都に近くて、しかも、要害の地があ

漢方薬と食事指導

株式会社 ドラッグストアー ひかしや

山崎町中央通り・TEL②0109

れば〃

秀吉はこう考えて、一時、山城・摂津の国境に近い山崎に宝寺城を築き、居城したことがありました。しかし、規模が狭隘で、常時の居所とすべき地ではありませんでした。秀吉は、種々検討した結果、石山本願寺の故地で、勇猛な織田軍団を長年に亘って苦しめ続けた〃大阪〃に築城することをきめ、十一年から工事を始めました。豊太閤の居城として歴史に残る大阪城は、こうして出現したもので、この後の国内平定活動は総べてここを中心に行われました。

しかし、姫路城は、この背後を守る播磨の重要拠点です。大阪城ができたからといって捨て去られるものではありません。秀吉はそう考えて、ここを羽柴秀長に預けました。秀長は、秀吉ただ一人の弟であり、最も忠実にその事業を輔佐しました。しかし、兄とともに征戦に余日がなく、留守居を置いて管理させていました。

株式会社
安井書店
宍粟郡山崎町山崎90
TEL山崎②0700(代)

天正十三年、秀長は新しく紀伊和歌山城に移り、大阪城の南辺を安全にする役目につきました。代って、姫路城へ入ってきたのは木下家定です。家定は、秀吉の正室、北ノ政所（ねね）の実兄です。攻城野戦の武功はあまり見られませんが、留守をあずかり、城内にのこる出陣武将の妻子を安全にし、民政をとのえるのは適役らしく、天正十年六月、光秀討伐に出陣するとき、既に、姫路城の留守をつとめていました。加藤清正・福島正則といった歴戦の勇将にくらべますと、全く地味で、目立ちません。今のことばでいうと、〃裏方さん〃の仕事に徹していたといえるでしょう。

家定が姫路城を預り、同城に起臥するようになった翌十四年、家定の長男勝俊が龍野城六萬四千石を与えられ、二男利房が若狭国高浜城二萬石を与えられました。また、三男延俊は、摂津国駒ケ林五百石を与えられ、父とともに姫路城に居りました。秀吉は、こうした間にも軍事を起こし、天正十五年（一五八七）には九州の島津征伐、同十八年には関東の北条征伐に出かけました。こうしたときには、大阪城の留守居をもつとめねばなりませんでしたが、この頃、播磨国内で与えられていた家定の所領は一萬

一千三百四十石でした。（天正十五年九月二十四日）のち、文禄四年（一五九五）二萬五千石となりました。

山崎闇斎の祖父浄泉は、この年より三十八年前の弘治三年（一五五七）、宍粟郡山崎村に生まれています。二十四才になったとき、すなわち、天正八年（一五八〇）姫路へ出て木下家定に仕えました。

この年は、前にも述べたとおり、三木城陥落に続いて、播磨の赤松系諸将が没落したときで、宍粟郡全域を押さえていた長水城も五月に落城しました。播磨の新旧勢力は、ここで、一度に大交替したわけです。山崎浄泉が山崎村を出て新しい城地となった姫路へ赴き、同城の留守居をつとめる木下家定に仕えた事情も、だいたい察せられたでしょう。

伝「播磨公弁円の墓」について

岩井忠彦

山崎町川戸の村の東北端に近い、山ふところの水田の中に、小さな墓地に隣接した木立がある。その木々のほぼ中央に、やや白味の強い、町内では大型に属する五輪塔がある。最近、立派な石の基壇と花筒が造られ、いつ訪れても一対の生花が供えられている。

基壇が造られた際に、最下部、いわゆる地輪部分が若干地中に埋められたようであるが、五輪塔は総高約一二〇センチ、笠（火輪）部の幅は約四〇センチある。全体的には比較的横幅があって、安定感のある姿である。この五輪塔を地元の人たちは播磨公（はりまのきみ）弁円の墓と呼んでいる。

弁円の名は、故吉川英治の長編『親鸞』に登場することでも知られる。源平争乱の時代に幼年時代を送った彼は、成長すると修験道に入り、次第に階位を昇った。そして、三十代の半ばの頃、常陸国に移った。建保二年（一二一四）のことである。

彼が常陸国に入り、その地の修験道の中心として活躍を始めてわずか三年後の建保五年弁円の人生を一変させる事件がおこった。浄土真宗の開祖・親鸞が承元の法難によって流されていた越後から、

マックスファクター
化粧品・毛糸・袋物
さどや
さつき通・TEL②0337

常陸へ移ってきたのである。

「上人が常陸に来住し、人々に専修念仏を弘布されて以来、信仰に入る者が多くなった」と『御伝鈔』は述べている。その性質上全面的に信頼できる文書ではないが、以後の宗勢の発展ぶりからみて信じてよい話である。

浄土真宗の隆盛とは逆に、弁円たちの修験道は次第に衰えるばかり。承久三年（一二二一）、遂に彼は板敷山で上人殺害を試みる。けれども、上人に出会った弁円は「害しようとする心はたちまち消え、後悔の涙を禁じることができなかった」（『御伝鈔』）

こうして、播磨公弁円は親鸞上人の門下に入り、名も明法房と改めて、上人のかたわらで生活を始める。のち、上人の帰京後も常陸にとどまって浄土真宗の弘布につとめ、建長三年（一二五二）にその地で入寂した。七十二才であった、という。一説によれば、彼は都の貴族の末であったが、戦乱を避けて播磨に移ってきたものともいわれる。

以上のような弁円の伝記は、しかし、必ずしも確実な根拠のあるものではなく、もちろん史料的な裏付けに乏しい。彼の墓と伝えられる五輪塔そのものからして、笠部の反り、水輪部のふくらみ、全体のプロポーションなどから推測すると、鎌倉時代のものと断定することは難しい。ただ、当時播磨国では修験道が盛んであり（その東の中心が三木市の伽耶院であり、西の中心が南光町の瑠璃寺である）、弁円がこの地で成長し、修験道に傾いたという可能性があり得るという程度である。

歴史的に重要なのは、弁円の生涯そのものよりも、むしろ川戸の村に弁円の墓（実際は供養塔であるが）が存在し、近代に至るまで、隣村の寺院から住職を招いて定期的に法会を営んでいた（『兵庫県宍粟郡誌』）という事実そのものであろう。

浄土真宗が急速に播磨に進出するのは室町時代、わけても十六世紀はじめ以降のことである。その中核が、船場と亀山の本徳寺であったことはいうまでもない。そして、英賀城主の三木氏をはじめ多くの人々に支持された浄土真宗は、たちまち播磨一円に勢力を確立した。英賀城や長水城が最後まで織田信長に抵抗したのも、本願寺と結びついた農民たちの反織田感情をぬきにしては考えられない。実際、山崎町域の人々も、信長による石山本

美術・工芸・画材
いとう画廊
贈答品に絵画・軸物・版画を!!
出水町通り・☎2－0371

願寺攻撃に際しては盛んに本願寺援助を行ったのである。このような時期に、浄土真宗信者の間に、その信仰と団結のシンボルとして、播磨公弁円の姿が大きくクローズアップされたのではあるまいか。そして、付近にあるものとしては特に立派な五輪塔そのものが、次第に信仰のよりどころとなっていったに違いないのである。

江戸時代まで、川戸には信者たちが集会に利用した道場があった。すくなくともこの時代まで、弁円の五輪塔は信者たちにとって大きな心の支えであったはずである。播磨公弁円の墓は、その真偽を超えて、民衆の信仰の歴史の証人であった。

現在、弁円の五輪塔は、これに祈ればなぜか歯痛が治るといわれ、訪れる人が少なくない。祈れば眼病が治る、歯痛がおさまる、時には夜尿症が治る、などと、信仰の対象にされている石仏や石塔は少なくない。非科学的、非合理的と片付けるのは簡単ではあるが、その祈りそのものが貴重な信仰の遺産であることもまた、無視できぬ事実なのである。弁円の墓は、弁円自身を超えて、歴史の中に生きている。

創業嘉永元年　きものと共に130余年
高級呉服の専門店
とくさや
山崎町本町（さつき通）
☎(07906)2-1680代

続群書類従山科家文書より見た
長水　宇野氏の内紛

藤原　すみ

山崎町史の二百頁に長水城宇野氏が「天正二年（西暦一五七四）父子不和故命家臣殺之也」と出て居ります。出典は播備作城記によるとされています都多宇野氏の内紛が書かれている続群書類従の中の言継卿記紙背文書の書状一通の中の山崎町史の都多宇野氏に関係ある部分を抄出し要約しますと、

「押領（年貢を横領）せる者あらば公用（年貢）を京進（納入）せば補任（代官に任命）等を申調へんと諭すべし。宇野右京亮も蔵人なる者と内紛ありて籠城せる故公用銭の京進は不可能なるべけれど京進を諭示（さとす）べし

十一月三日四日　裏

捻封端裏穴書

「　自玉芳

光明院殿　　惟先」
回鱗

続群書類従の中の山科家文書は応永十三年（西暦一四〇五）足利義満の死ぬ少し前から天文年間（西暦一五三三）頃まで百二十八年間飛び飛びに残る山科大納言家の記録で現在の蔦沢がその頃には都多と言って山科大納言家の荘園であり宇野越前守がその代官として任命され年貢を納めていた様子が窺えます。僧惟先の書状の年代が天文二年十一月（西暦一五三三）山崎町史の播備作城記による年代が天正二年（西暦一五七四）とありますが、播備作城記は江戸時代の元禄年中位に書かれたものとされて居ります。四十一年古くなりますが史料としては紙背文書に信憑性があると考えます。又書状の文面から年貢の事などそっちのけで籠城をしている様子も想像されて興味深いものがあります。書状の中に御本所（山科大納言言継卿）御迷惑の段申聞、少しなりとも進覧候へと申可候云々とあって当時年貢の取立てが思うにまかせず荘園制度そのものが崩れゆく様子も窺えて移りゆく時代が感ぜられます。姫路市発刊の姫路城史の三巻に宇野越前守が都多の代官であったが都多は姫路市の津田町であると書かれて居ります。紙背文書の僧惟先の書状の文面や山科家礼記の中に宇野越前守に年貢の催促をした事が書かれていて、例えば

文明十八年　十月廿四
日　晴　甲寅
一、松井方　庄方都多

事に宇野方へ状遣之

とあるのを読むと地理的に長水城宇野氏に山科家の都多の荘園が近いのでないかと考えられるし、今の蔦沢の都多は上ノ中ノ下ノ三ケ村の古称であり、従って山科家の荘園の都多は姫路市津田町ではなく山崎町蔦沢であると考えます。松井方庄方とあるのは段の松井氏高下の庄氏の御家系に関係があるのでないかと思います。

食品の店
いまや
さつき通り4丁目
TEL②0169

古寺を訪う

安井清介

山崎郷土研究会の皆さんが郷土山崎を愛されるように私達は日本人として日本という国を愛します。国を愛す

るとは何か。そのような議論は不要です。私達が日本の生まれたふるさと奈良・京都を中心として近畿にわが日本のふるさとを求める心情はすなわち国を愛する心に通じるものがあるのではないでしょうか。

〃京都大原三千院
恋に疲れた女がひとり
結城に塩瀬の素描の帯か
池の水面にゆれていた
京都大原三千院
恋に疲れた女がひとり〃

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL②0036

往年、私は京都洛東の泉涌寺、南禅寺、永歓堂、詩仙堂、清水寺、銀閣寺、洛西の西芳寺（苔寺）、大覚寺、清涼寺、念仏寺、祇王寺、二尊院、常寂院、常寂光寺、落柿舎、天竜寺、仁和寺、竜安寺、神護寺、高山寺、西明寺、広隆寺、洛南は東福寺、醍醐寺、随心院、勧修寺、洛北では三千院、寂光院、鞍馬寺、洛中では大徳寺、金閣寺、壬生寺、本能寺、東寺、東・西本願寺等々三十余ケ寺を訪れました。

昨年郷土研究会も奈良法華寺、秋篠寺を拝観いたしました。今年も春の研修旅行は四条畷神社と京都府相楽郡の浄瑠璃寺、蟹満寺に行きました。岩船寺は交通渋滞のため時間が遅れ行くことができず残念でした。最初国宝五重塔のある海住山寺を予定しておりましたが、バス駐車場より徒歩二十分山道の行程ということで残念乍ら蟹満寺に変更いたしました。

郷土研究会で計画できない箇所は個人的に拝観されるのがよいと思います。皆様のお役に立てばと思い次に古寺探訪の好きな方々のため京都、奈良近郊の古寺をご紹介いたしましょう。

名称	所在地	創建	国宝	重要文化財
平等院	京都府宇治市宇治蓮華町	藤原頼通後冷泉天皇后、寛子頼通の子師実、師房 永承7年（1052年）	1. 鳳凰堂 2. 阿弥陀如来像 3. 鳳凰堂中堂天蓋 4. 雲中供養菩薩像 5. 鳳凰堂壁扉画九品来迎図 6. 鳳凰(南) 7. 梵鐘	1. 観音堂 2. 十一面観音菩薩像
法界寺	京都市伏見区日野西大道町	日野資業 永承6年（1051年）	1. 阿弥陀堂 2. 阿弥陀如来像 3. 阿弥陀堂壁画	
安楽寿院	京都市伏見区竹田内畑町118	鳥羽上皇 保延3年（1137年）		1. 孔雀明王像 2. 阿弥陀如来像
禅定寺	京都府綴喜郡宇治田原町大字禅定寺	東大寺の平崇上人 長徳元年（995年）		1. 十一面観音菩薩像 2. 四天王像増長天 3. 月光菩薩像
三室戸寺	京都府宇治市三室戸	園城寺隆明上人 康和（1099～1104） 文明年間再興（1469～87）		1. 釈迦如来像
地蔵院	京都府宇治市白川上リ谷	藤原頼通の女、四条皇太后宮寛子		1. 阿弥陀如来および脇侍像
万福寺	京都府宇治市五ケ庄三番割	隠元禅師 寛文元年（1661年）		1. 総門 2. 大雄宝殿 3. 法堂
金胎寺	京都府相楽郡和束町字原山	役小角とも泰澄 永仁6年（1298年）		1. 多宝塔

名称	所在地	創建	国宝	重要文化財
妙光寺	京都府 宇治市 槙島木幡	平等院創建の時、同じく建立され、のち天文年間（1532～55）再興		1. 薬師如来像（京都国立博物館寄託）
岩船寺	京都府 相楽郡 加茂町 大字岩船	行基 天平勝宝元年（747年） 弘安8年（1285年）		1. 三重塔 2. 阿弥陀如来像 3. 普賢菩薩像
浄瑠璃寺	京都府 相楽郡 加茂町 大字西小	聖武天皇の勅願 行基菩薩 天平11年（739年） 多田満仲 天元年間（978～983） 永承2年 本堂建立	1. 本堂 2. 九体阿弥陀如来像 3. 四天王像 4. 三重塔	1. 吉祥天像 2. 吉祥天像厨子絵 3. 地蔵菩薩像 4. 不動明王二童子像 5. 地蔵菩薩像（東京国立博物館寄託） 6. 薬師如来像
海住山寺	京都府 相楽郡 加茂町 大字例幣	聖武天皇の勅願 良弁僧正 天平7年（735年）	1. 五重塔	1. 十一面観音菩薩像二体（一体は奈良国立博物館寄託） 2. 法華経曼荼羅図（京都国立博物館寄託）
西明寺	京都府 相楽郡 加茂町 大字大野	行基菩薩 永承2年（1047年）の銘文のある薬師如来像を本尊とする		1. 薬師如来像
高田寺	京都府 相楽郡 加茂町 字高田 小字奥畑54	由緒不明		1. 薬師如来像

名称	所在地	創建	国宝	重要文化財
かにまん 蟹満寺	京都府 相楽郡 山城町 大字綺田	古い歴史をもつ 桑河勝の弟、 和賀の建立ともいわれる	1. 釈迦如来像	
阿弥陀寺	京都府 城陽市 枇杷庄 小字大堀3	以仁王を弔うために創められた		1. 薬師如来像
観音寺	京都府 綴喜郡 田辺町 大字普賢寺		1. 十一面観音菩薩像	
薬師寺	京都府 相楽郡 和束町 原山広垣内 44の1	融通念仏宗に属す 元禄年間に火災に遇いそれ以前の由緒不明		1. 薬師如来像
春光寺	京都府 相楽郡 南山城村 大字北大河原 小字北垣内	由緒不明		1. 薬師如来像
神童寺	京都府 相楽郡 山城町 大字神童子	推古4年創建 （596年）		1. 日光菩薩像 2. 不動明王像
常念寺	京都府 相楽郡 精華町 大字祝園	開創不明 寛正2年 （1461年） 随空恵順によって中興		1. 菩薩形像
寿宝寺	京都府 綴喜郡 田辺町 大字三山木	文武天皇 慶雲元年 （704年）		1. 千手観音像

史跡部だより

昭和五十七年度の新しい史跡指定は、次の三ケ所を予定しております。

◎清水口見付御門跡

城下町山崎の東の出入口で、永歓橋の西側です。ここに門があって出入りの者をチェックする――あやしい者を見付るための門がありました。

同じような役目の門が鴻野口や門前口にもあったので、ここも山田口とでも言えばよいのですが、この門のすぐ西にとてもきれいな清水が湧き出て、その水がすばらしくおいしかったので有名になり、清水口と言う名が生れたようです。今も井戸があります。

このおいしい水を使って茶屋ができ、とてもよくはやっていたのですが、池田輝政が姫路城主となってからは、その家臣中村主殿助が代官として山崎へ来ました。その代官所をお茶屋の跡へ置きました。

その後大阪夏の陣の元和元年、輝政の四男輝澄が、山崎藩主となったので、代官所はなくなり、輝澄はその跡へ姫路の野里にあった青蓮寺を移築しました。青蓮寺は輝澄の祖母（徳川家康の側室西郡の局（ニシゴホリ））の菩提寺であります。今も輝澄の祖母西郡の局と生母督姫（家康の女）の霊を祀る御霊廟（オタマヤ）があります。

◎生野義挙志士終焉の地

但馬の生野は銀山として有名で、佐渡の金山とならんで徳川幕府の台所をまかなっていました。それで生野には代官がいました。

幕末、尊王攘夷論が盛んになり、文久三年十月には、平野次郎国臣（筑前藩士）、南八郎（薩摩藩士）、美玉三平（本名高橋裕次郎・薩摩藩士）らが先の哈御門の変で長州へ都落ちをした七卿の一人、沢主水正宣嘉を奉じ、大和十津川の旗上げに応じて、但馬地方の農村有志の士を誘い、生野代官所を襲いました。が結局失敗に終って美玉三平と和田山町高田の大庄屋中島太郎兵衛、その弟黒田与一郎の三人は、神子畑から黒原へ出て木の谷まで

清酒
山陽盃
SANYO HAI
兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限会社

落ちのびたが、美玉は農民に射たれて倒れ、重傷の中島は村年寄善蔵方で弟与一郎の介錯で切腹しました。与一郎は捕えられ京都六角の獄舎で病死しました。

美玉三平が倒れた木の谷の山神社のあった所に今、美国神社として三人の霊が祀られています。下の国道ばたに史跡の標識を建てる予定であります。

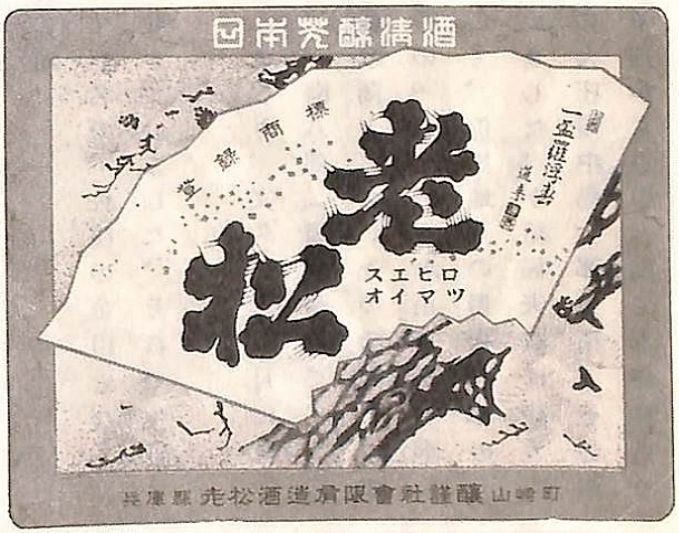
◎桓武伊和古墳

都多の桓武伊和神社は、人皇第五十代桓武天皇が祭神であります。その後の宮山は桓武天皇の御陵であるとの伝説がありました。それで昭和八年の正月から、氏子や各種団体の協力で発掘がはじめられ、石棺やたくさんの葺石（フキ）（丸い五輪さんのような石）、赤く美しい粘土層（深さ、巾ともに約一米位で山の他の部分と全く異質の土）が現われました。然しすでに盗掘された後でめぼしい物は何もありませんでした。当時宮内省諸陵寮より和田千吉博士や、内務省から国府犀東博士も来村され指揮されましたので、近くの経納山よりは山吹双雀鏡や燧釜（古代の火打具）古銭多数が出土しました。

こうしたことからも、桓武天皇陵でないと仮定しても、相当高貴な方のお墓であろうと思われ、昭和八年初に郡内の話題をさらった有名な古墳であることは古老の方々御存知の処でありますのでここは宮前橋の西詰に標識を建てる予定であります。

以上本年度予定の三ケ所の史跡の概略であります。四月中には何とかして標識を建てたいと思っております。昨年度までの二十三ケ所に加え二十六ケ所になります。

（以上）



事務局だより

一、昭和五十七年度も更に会員の増加を計りたいので、ご親戚、知人の方で未加入の方に郷土研究会へご入会をお勧め下さい。

二、郷土研究会についてのご連絡は左記へお願い申します。

山崎郷土研究会事務局

山崎町　　安井清介宅